

Cross-Curricular English Lessons in Junior High School based on CLIL: Teaching Mathematics Through English

教科・領域教育専攻

言語系コース (英語)

砂川 瑞紀

指導教員 ジェラード マーシェソ

1. はじめに

1.1 研究目的

本研究では、Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習 (CLIL) の中学校英語教育での可能性を探る。CLIL 実践における利点とこれからの課題について展望する。また、CLIL の授業がどのように中学校の生徒たちのモチベーションに作用していくかを検証することを目的とする。

1.2 研究背景

CLIL とは教科内容と言語を同時に教えることを目的とした外国語教育の原理であり、特にヨーロッパでは外国語教育に関わる研究者や教員にはよく知られている。CLIL は多様なニーズに応えるための指導原理を提供するものであり、キーワードは「統合」である。というのも、学習者にとっては教科内容と言語は「統合」され活用されていくものであるからだ。

英語の理解度について文部科学省が行なった質問紙調査の結果、「小学校で楽しめていた英語の授業が、中学校ではそうではなくなった」との回答が多数であった。普段英語に触れる機会の少ない日本での英語教育は、ヨーロッパのそれとは違い、工夫を要するものだと考えられる。多種多様な分野からグローバルに英語を使用する需要が高まる中、内容・言語を統合した CLIL の授業は昨今注目を浴びている。

2. 論文の構成及び概要

第1章では、まず前述の研究目的について述べた。本研究は、日本の公立中学校で CLIL による授業実践を行い、その利点とこれからの課題について、また生徒のモチベーションにどのように関係していくか、について議論していくものである。生徒からの質問紙、ワークシート、授業のビデオを元に調査を進める。

第2章では、研究背景として、参考文献の概観とそこから見る CLIL 授業のこれまで示唆されてきた課題について述べた。CLIL の概要、構成要素である 4C (Content, Communication, Cognition, Community)、小中学校で行われた CLIL 授業の研究について示した。学習者の英語に触れる機会の希少さ、学習者の学力の差、文法内容の曖昧さ、などが課題として挙げられた。

第3章では、研究方法を主に述べた。本研究の対象者は、M 市の公立中学校3年生2クラスの生徒とした。授業は平成30年7月13日と同月17日に2回ずつ、計4回行なった。数学教材は1年生の時に既に学習した方程式の問題を選んだ。1回目の授業の前と2回目の授業の後に質問紙調査を行い、その結果を検証した。質問紙は選択肢と自由記述の項目があり、生徒が自己評価できる内容とした。また個人のワークシートやグループ活動成果を調査した。

第4章では、結果及び考察を示した。参加者は1回目：56名、2回目：55名であった。2クラスで実施した2回の質問紙の結果を考察した。選択肢の質問は4Cに関する結果をもとにモチベーションとの関連を検討した。また自由記述の質問は肯定・否定意見に分け、KJ法で4C・モチベーション・CLIL授業について分類し記述をそれぞれ検討した。

はじめてCLILの授業を受ける生徒が過半数以上であったが、多くの生徒から肯定的な意見があった。またペアやグループ活動で協力して参加できたことが有意義であったという意見や、少し難しい問題を解くことで達成感を感じられたとの意見もあった。そして数学以外の他の教科も英語で学習してみたいという意見も多かった。一方で、言語や教科内容の理解度について消極的に考える生徒も少なくなかった。表1にもあるように、多くの生徒が肯定的な意見と同時に、授業中不安であったことを記していた。

表1. 自由記述の結果

		1回目	2回目
1組	肯定的	8	22
	否定的	18	22
2組	肯定的	6	22
	否定的	20	20

第5章では、まとめと、本論全体の結論を述べ、今後の展望を記した。

3. まとめ

本研究は、日本の公立中学校でCLILによる授業実践を行い、その利点とこれからの課題について、また生徒のモチベーションにどのように関係していくか、について議論していくも

のであった。中学校では2021年からの新学習指導要領の全面実施に向けて、言語教育にも期待が集まっている。その中で文部科学省は、他教科と教科横断的学習を通じての学び方が記されている。学んだ知識を、言語を介して活用することでの相乗効果が期待される。本研究がその1つの例として活用され、そして更にCLILによる実践研究を進めていきたい。

本研究は、M市の公立中学校における実践とその考察に基づいている。この実践結果は、全ての中学校に当てはまるものではなく、より効果的に実施していくためには、それぞれの対象や状況に応じて判断されるべきであると考え

4. 終わりに

「内容と言語の統合」という発想は近年作られたものではなく、古くから多くの国で行われてきた語学習得法である。私の思う「言語」はコミュニケーションのための「道具」であり、CLILの掲げる「使いながら学び、学びながら使う」(“Learn as you use, use as you learn”)という理念と合致した。またCLILは、内容学習をしながら偶発的に英語力を期待するイマージョン教育とは違い、あくまでも語学教育として、意図的に目標、内容、指導法、教材が選択され設計される。本研究の授業実践から、適切な内容指導・言語指導・教員連携など、自身の課題が多く残ったが、学習者だけでなく教える側もまた、鍛錬してその可能性を広げていくことが大切であると考え、精進していく心積もりである。

これから教育の道を目指す1人として、CLILの授業が、生徒たちの英語力向上により効果をもたらすことを期待したい。